口頭発表Ｂ④

大学生による交流型ワークショップの成果と課題
―「キャンパス・ビジョン」の企画・開催を通して―

浦邊研太郎[1)]、福田喬也[2)]、牧迫雄也[2)]、小烏正也[1)]、吉田 博[3)]
１）徳島大学工学部　２）徳島大学総合科学部　３）徳島大学大学開放実践センター

1. はじめに

グローバル化する社会においては、世代、立場、文化を越えた視点を持つことが求められる。このようなグローバルな視点は、大学生にも求められる能力であり、積極的にさまざまな人と関わることや異なる価値観に触れることによって身につけることができる。文部科学省（2008）では、グローバル化する社会、ユニバーサル段階に達した大学における、教育改革の基本方針が示されている。具体的な施策はさまざまな取り組みとして講じられているが、現在の大学生が自身のキャンパスライフの中で、違った視点に触れる機会を見つけることができているのであろうかという疑問が残る。これまで、浦邊、牧迫、小烏は繋ぎ create ※1 において、主に徳島大学生を対象に、きっかけづくりの場を提供してきた。しかし、前述したような社会においては、大学、立場、世代の異なるさまざまな人と、グループワークやディスカッション等を通して、キャンパスライフにおける自身の考えを深めることが、極めて有意義ではないかと考える。そこで、筆者らはこのような考えのもと、「大学生が新しく何かを始める『きっかけ』を見つけられる場を作りたい」という思いを抱く学生に声をかけ、プロジェクトチームを結成し、「キャンパス・ビジョン（以下Ｃ・Ｖ）」を 2011 年 11 月 3 日に開催した。新しい試みであるＣ・Ｖの成果と課題を明らかにすることは、今後の学生支援を検討する上で有益であろう。そこで、本発表は、Ｃ・Ｖでのディスカッションの様子を紹介し、Ｃ・Ｖが参加者にどのような影響をもたらすことができたのか、考察を行う。

※1　繋ぎ create とは、大学生にとって新しく何かを始めるきっかけ作りを支援するために、出会い・交流の場を提供する学生チームである。

2. キャンパス・ビジョンとは

Ｃ・Ｖの目的は以下の 3 つである。①「新しく何かを始めるきっかけを掴む」、②「ディスカッションを通じてコミュニケーションの面白さを知る」、③「自身のキャンパスライフを再発見する」。これらの目的を達成するために、プロジェクトチームでは検討を重ね、企画を創り上げた。Ｃ・Ｖの特徴として、次の 4 点が挙げられる。①徳島大学の学生・教職員だけでなく学外の学生・教職員・社会人にも参加を呼びかけることとし、プロジェクトチームには早い段階から四国大学等の他大学の学生を含め、徳島県内外の学生を巻き込む形で企画を進めた。②Ｃ・Ｖで扱ったテーマは「『学習すること』とは？」、「『活動すること』とは？」、「『就活すること』とは？」であり、すべてキャンパスライフの中でコアとなる内容である。③参加者は始めに 3、4 名ずつ、28 グループに分かれて議論を開始した。Ｃ・Ｖの議論は、「ワーク」と呼ばれるテーマに沿った意見を創出する作業と、「ディスカッション」と呼ばれる創出した意見を他のグループと議論し厳選する作業に分けられる。その後、厳選された意見をテーマ別に発表した。④Ｃ・Ｖのディスカッション終了後には、お菓子を用意し参加者同士の親睦を深めるフリートークの時間を設けた。

3. キャンパス・ビジョンの様子

Ｃ・Ｖには、11 大学から学生 86 名、教職員 14 名、また一般参加者 8 名の計 108 名が参加した（見学・企画者を含む）。はじめはグループワーク活性化役が話を振るなどして、参加者に意見を求めていたが、次第に参加者からの積極的な発言が見られるようになった。「ワーク」は各テーマごとに分かれて実施したが、教員が大学の勉強とはど

ういうものであるかを語ったり、社会人が自分の就活の経験談を語ったりするなど、各グループともに学生、教職員、社会人がそれぞれの立場でテーマを捉え、活発な話し合いが行われた。その後の「ディスカッション」では、それぞれのグループの意見がぶつかり合った。各グループとも同じテーマということもあり、意見が重なることも多かったが、似ている意見の中で差異を強調したり、全く新しい視点から切り込んでいく学生もいた。ここでは、とても白熱した議論となり、意見の厳選が行われた。発表の際は、各グループが厳選した意見を同じテーマの参加者全体で共有し、質疑応答を通して、とても濃い時間となった。また、フリートークの時間には 70 名余りもの参加者が残り、ディスカッションにおける議論の続きや、大学、社会人といった立場を越えた交流を実現することができ、参加者にとっては大変有意義な時間になったことが伺える。

4. 結果と考察

Ｃ・Ｖでは参加者アンケートを実施し、部分参加者・見学者を除く 92 名から回答を得た。「『キャンパス・ビジョン』は、あなたのキャンパスライフを見つめなおすきっかけになりましたか？」（5 件法）という設問に対して、参加者の 5 割が「そう思う」と回答し、「どちらかといえばそう思う」を合わせると 8 割に達している。このことから、Ｃ・Ｖの目的であった「キャンパスライフの再発見」が概ね達成されたといえる。また、自由記述において、良かった点として、「他大学の人と交流できた」、「いろいろな意見が聞けてよかった」等の意見が多く、ワークやディスカッションを通して、学生同士もしくは、教職員、社会人との交流やコミュニケーションを行えたことがわかる。一方で、改善点として、グループワークやディスカッションの進め方や時間配分、テーマの範囲や論点、テーマ数などが挙げられた。また、徳島大学からの参加者が約 50 名と最も多かったが、総合科学部の学生に偏っていたこと、徳島県内の大学にも呼びかけたが四国大学からの参加だけに留まっていたことも今後の改善点である。

Ｃ・Ｖは、大学、立場、世代の異なるさまざまな人との交流を実現した点、多数の参加者にとってキャンパスライフを考え直すきっかけとなった点において意義あるものであった。しかし、Ｃ・Ｖでの議論がこの場限りのものにならず、日々のキャンパスライフにおける行動変容にまで繋がれば、さらに意義ある企画となる。今回挙げられたテーマ設定に関する改善点などはとくに検討し、次回の企画・開催に繋げたい。

図１「キャンパス・ビジョン」の様子

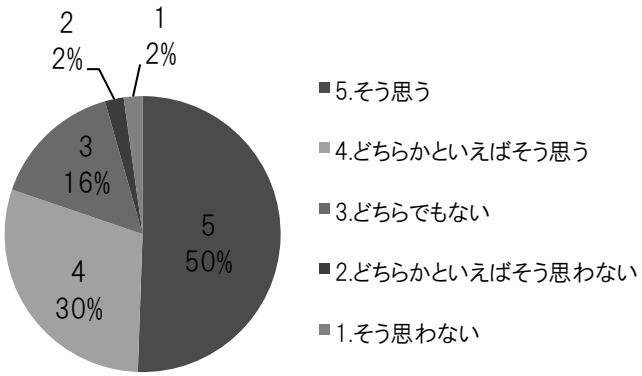

図２「キャンパス・ビジョン」は、あなたのキャンパスライフを見つめなおすきっかけになりましたか？

参考文献・資料

1) 文部科学省：学士課程の構築に向けて，中央教育審議会答申，2008